吸血鬼とメイドと少女

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼とメイドと少女

【Ｎコード】
Ｎ８０９７Ｈ

【作者名】
蒼

【あらすじ】
親に捨てられた名も無き少女と紅魔館の主レミリア・スカーレット、その従者の十六夜咲夜の話

月夜の捨て子（前書き）

オリキャラが主役です。嫌いな人は読まないほうが良いです。この作品は「銀の殺人鬼改め・・・」を読んでいないとよくわからないかも知れません。読んでない人は出来れば先に読んでみてください。

月夜の捨て子

親に捨てられた。理由は分からなかったが、ただそれだけがわかった。
突然だった。昨日まで優しかった父が何か呟いたかと思うと、私を家から遠く離れた場所まで連れてきて、私を置き去りに帰った。
私はずっと泣いていた。夜が来るまで泣き続けた。
突如今までうるさく鳴いていた鳥や虫達が静まり返った。
「あら、この子供かしら？」
「そのようです」
驚いて目を上に向ける。そこには宙に浮いた吸血鬼とメイドがいた。

〜十分ほど前〜
「ふぅ、夜に空を飛ぶのは楽しいわね。そう思わない咲夜？」
「そうですね、お嬢様」
私はお嬢様と散歩に出ていた。なんでも暇だったらしい。
うぇーん、ひぐっ―
「何かしらこの声？」
「子供の泣き声ですね」
「ふーん、面白そうね。見に行きましょう」
「はい、お嬢様」
お嬢様は泣き声に興味がわいたようで、バサリと羽ばたき声の方向へ飛んでいった。

お嬢様と私が人間の子供―短い黒髪の少女―を発見し、少し話していたら驚いたのかこちら―いや、お嬢様か―を見て後退りしていた。

まあ突然の反応である。お嬢様は吸血鬼なのだから逃げようとしたのだろう。
「お嬢様どうします？」
「興味があるから捕まえてちょうだい」
「分かりました」
お嬢様の要望通りに、少女に近づき後ろから手を押さえ捕まえた。
少女は暴れたがお嬢様が近づくとただ震えるだけになった。
「あなた何故ここに居るのかしら？しかもこんな時間に」
「・・・お、親にす、捨てられたの」
「ふぅん、理由は？」
「わ、分かんない」
「・・・・・・」
お嬢様が暫く考えたかと思うと、ニヤリと笑いこう言った。
「なら家に来なさい。咲夜当分の世話は頼んだわ」

・・・へっ？いきなりこの吸血鬼は何を言ってるんだ？家に来なさい？吸血鬼の館に住むのか？私が？
「はい、部屋はどうしましょうか？」
「一応慣れるまで咲夜の部屋で」
あれ、完全に話が進んでるよ。でも、怖くて逆らえないし。
「あなたもそれでいいわね」
「・・・いやです」
「そう、でもここに居たら明日の朝までに妖怪に食べられてるわよ。それでもいいの？」
吸血鬼の館に行くか、妖怪に食べられるか・・・私は・・・
「あなたの家に行かせてください」
「頭のいい人間ね。咲夜、紅魔館に帰るわよ。その人間を連れて飛びなさい」

「はいお嬢様。あなたこれから飛ぶのでちゃんと掴まっていなさい」
「はい」
咲夜さんはそう言って私を抱き抱え空に飛んだ。

空を飛んでいるとき、咲夜さんが話し掛けてきた。
「あなた名前は何て言うの？」
「桜です」
「名字は？」
「教えてもらってないんです」
「そう、私は十六夜咲夜よ。よろしく桜」
「よ、よろしくお願いします」
「あちらのお嬢様は私の主で」
「レミリア・スカーレットよ。覚えておきなさい」
「は、はい」
突然話し掛けられたので驚いた。
「あ、あのなんと呼べばいいんですか？」
「そうね・・・お嬢様もしくはレミリアさんかしら」
「わ、わかりました」
なんだかとても眠くなってきた。瞼が重い。

「着いたわ」
その声で目を覚ますと、とても大きな紅い館の前に居た。
「ここが紅魔館。あなたがこれから住むところ」
「・・・大きいですね」
「中も広いわよ。さあ入りましょう」
中に入って驚いた。レミリアさんが言ったように館の中も広かった

のだ、迷子になってもおかしくないくらいに。
咲夜さんが私を床に下ろして言った。
「桜がとても眠そうなのですが」
「じゃあ咲夜、その子をあなたの部屋で寝かせてあげなさい。私は部屋に居るわ」
「はい、お嬢様。いくわよ桜」
「はい」
結局、何も食べてないこともあってふらふら歩いていたら、見かねた咲夜さんがまた私を抱き抱えて運んでくれた。
「あの、ありがとうございます」
さっきからずっと運んでもらってちょっと申し訳なかった。
「いいわよ。これくらいなんでもないし」
「いや、他にも館に住ませてもらったり」
「それはお嬢様に言うべきね。ここに居るのはお嬢様のおかげなんだから」
「はい」
後でレミリアさんにちゃんとお礼をしよう。そう考えていたら、突然咲夜さんが立ち止まった。
「ここが私の部屋よ」
私を片手で抱えたまま咲夜さんが扉を開けた。ってあれ？すごいよこの人、子供の体重を片手で楽々支えてるよ。
「どうかしたの？」
「な、なんでもないですよ」
何故そんなことができるのか聞きたかったがいろいろ恐ろしかったので止めておいた。
「なんでもないならいいんだけど。はい、このベッドで寝なさい。疲れてるんでしょ」
「あ、でも咲夜さんの寝るところが」
部屋に置いてもらいさらにベッドまで占領するのはちょっとまずい。
「いいから寝なさい」

「・・・はい、おやすみなさい」
「おやすみ」

よっぽど疲れていたのか少女―桜―はおやすみと言った直後スースーと寝息をたてていた。
「お嬢様の部屋に急がなくてわ」
そう言った瞬間、時―世界の全て―が止まった。その中ただ一人だけ咲夜だけが動いていた。
コツコツコツ
「はぁー、やはり妖精メイドでは限界があるわ」
時の止まった紅魔館を歩いていると、妖精メイド達が自分達の服などの洗濯とほんの少しの掃除しかしていない様子が目につき、ため息を吐いた。はぁ、あの子達は指示を出さないと上手く働いてくれないんだから。
「それにしてもお嬢様があんな子供に興味を持つなんて、どうしてかしら?」
考えても仕方がない。そう思い時を戻す。さすがにお嬢様の部屋にノック無しで入るわけにはいかない。
トントン
「入っていいわ」
「失礼します」
「咲夜、来る頃だと思っていたわ。こっちに来なさい」
ベッドに座ったお嬢様がこちらを見て手招きした。
「はい」
お嬢様に言われた通り、近づく。
「あの人間はあなたから見てどう?」
「ごく普通の十才くらいの少女ですが」
何の能力もないただの子供、養えなくなったため捨てられたのだろ

う。
「そう。あの子は何かしらの能力があるわ」
「私は何も感じませんでしたが」
「まあ、分かりにくいものだしね。大方あの子が親に捨てられたのもそれが理由ね」
「そうですか」
能力があるだけで化け物扱い、親にさえ見捨てられる。
―化け物だ！時を止めるなんて人間ではない！
―あんたは私の子じゃないわ！
―ここから出ていけ！
その言葉と私を恐れ攻撃してくる人。
昔のこと、十六夜咲夜という名を貰う前のこと。私はただ時を止められただけ、悪用はしなかった。
なのにっ、あんなにも優しかったのに！
口の中に血の味が広がる。いつの間にか唇を噛んでいた様だ。
あの桜という少女にはどんな能力があるのだろう。お嬢様に害が無ければいいが。
もし害が及ぶならば即座に排除してみせる。それがお嬢様に救われた私が出来る唯一の恩返し。
「それより咲夜」
「はい？」
お嬢様の声で思考は中断される。
「喉が乾いたわ」
「では紅茶をお持ちします」
今日買ってきたばかりの茶葉があったはずだ。
「咲夜。紅茶じゃなくて血が欲しいの。飲ませてちょうだい」
「っ首からですか？」
「もちろんよ」
ニヤリとお嬢様が笑った。
「っどうぞ」

カプッ
「っ！・・・っん」
噛まれた瞬間どうしようもない感覚が体を襲う。血を吸われて貧血になっているのもあるが全身に力が入らないのだ。この感覚は何度血を吸われても慣れない。ついに床に膝をついてしまった。

ゴクッゴクッ、ペロッ
お嬢様が噛み傷から滲み出た血を舐め取り、満足気に笑う。
「ふぅ、やはり咲夜の血は美味しいわ」
「よ、喜んでいただけて幸いです」
未だ座り込んでいる私が可笑しかったのかお嬢様がクスクス笑いだす。
「クスッ。おやすみなさい咲夜。あなたも早く部屋に戻って休みなさい」
「・・・は、はい」
あの感覚と貧血のため体に力が入らずもう返事もまともに出来なくなっていた。
疲れたのでお嬢様が言われた通り、多少ふらつきながらも自分の部屋に戻り休むことにした。

先ほど咲夜は血を吸ったら力が抜けたのか、床に座り込んでしまった。
顔を真っ赤にしてへたりこむ姿が可愛くて思わず笑ってしまったが、咲夜は前より血を吸うときに恥ずかしがるようになった。何故だろうか？
まぁいい。それよりも桜は能力ゆえに捨てられたのだろうと言ったときのあの表情。
やはり昔を思い出したのだろう。時を止めるという強力な能力があ

ったから人に恐れられ追われた自分の過去を。
ふぅ、そろそろ寝ましょうか。吸血鬼が夜寝るのも変な話だけど。

はぁ、やっとついた。もうくたくただ。
メイド服を脱ぎパジャマに着替えるとベッドはすでに桜が寝ているので長椅子で寝ることにした。
はぁ、明日から大変になりそうだ。

月夜の捨て子（後書き）

読んでくださりありがとうございます。誤字脱字等に気付いた場合は教えてください。なお、更新はとても遅いと思いますが見捨てないでください。

住人たちとの対面

「ふぁー、やっぱりまだ眠いなー」
伸びをしながら体を起こして目を開けると一瞬何故こんなところに居るのか分からなかった。
「あら、もう起きたの。早いわね」
振り向くとそこにはパジャマからメイド服に着替えている途中の咲夜さんがいた。
あー、そう言えば私紅魔館に来たんだっけ。
そーいや今まで気付いてなかったけど咲夜さんなんかスタイル凄くない？っとそんなことより
「おはようございます」
「おはよう、桜」
「あの、ベッド使っちゃってすいません」
「いいのよ、気にしてないし。それよりもうすぐ朝食を作るけどあなたも一緒に来る？」
「はい」

「うわー」
咲夜さんの着替えが終わり部屋から出るとそこにはたくさんの妖精達が飛び回っていた。
「この子達はみんな紅魔館のメイドよ。そして私がメイド長をやっているわ。さあ急ぐわよ」
咲夜さんが歩きだしたので私も急いで後を追った。
しばらく歩くうちに妖精を見ていてふと疑問を感じた。
「あの、他に人間は？」

「この紅魔館には人間は私だけよ」
「へ？」
え？つまり後はみんな妖怪とか妖精だけってこと？・・・私はなんて所に来てしまったんだ。

人間は私しか居ないと言ったら桜はいきなりズーンと音が聞こえてきそうなくらい沈んだ。
「だ、大丈夫？」
思わずそう声をかけた。
「はい、多分大丈夫だと思います」
一応顔は上げてこちらを見た。あまり大丈夫に見えない。こちらを見ていたかと思うと首を傾げた。
「・・・？」
「どうかした？」
「あ、その首の傷は何ですか？」
「っあ・・・これは・・・」
急いで手で覆う。いまさら隠しても、もう遅い気もするけど。
お嬢様に血を吸われた傷だと言ってもいいが少し恥ずかしい。前にパチュリー様に笑いながら言われたが吸血鬼に血を飲ませるのは求愛の意味があるらしいのだ。
はぁ、言わないのも不自然か。
「・・・お嬢様に血を吸われた傷よ」
「そ、そうなんですか」
「ほら急ぐわよ」
詳しく聞かれる前に話を誤魔化した。実際急がなければ間に合いそうに無いのだし。

傷について聞いた瞬間、咲夜さんは少し顔を赤くして焦った。何か不味い事を聞いたのだろうか。
少し黙った後レミリアさんに血を吸われた傷だと言った。なぜ焦ったのだろう？聞こうと思ったが咲夜さんが急ぐわよと言い歩調を速めたので諦めた。
それにしても本当に広い。迷子になりそうだ。というか咲夜さんが居なかったら確実に迷う。
「ついたわよ」
そこは大きな厨房だったが誰も居なかった。
「あなたはそこの椅子にでも座っていなさい」
そう言われて指差された椅子におとなしく座って咲夜さんの様子を見ていることにした。
・・・早っ。なにあれ目がおかしいのかな？そう思い目を擦るが目の前の現実は変わらない。
咲夜さんは４つの料理を同時進行していた。それも無駄な動きが無いのだ。
あれ？なんか瞬間移動しなかったか？すごいなーメイドさんって空飛んだり瞬間移動できるのか。
「ふぅ終わった」
そう言う咲夜さんの前にあるテーブルには野菜スープ、フランスパンに肉料理が二種類。
いやいやいやありえないでしょう。なんでこんな豪華な料理が十五分で完成するの？フランスパンなんてさっきオーブンで焼いたばかりだよ。
「さて、隣の部屋で食べるから運ぶのを手伝って」
「はい」
不思議に思いながらも食事を隣の部屋に持っていく、そこには大きめのテーブルがあり奥の席にはレミリアさんが座っていた。
「あら、おはよう」

「おはようございます」
「咲夜は？」
「今料理を運んでくるところです」
「そう」
少し話すと興味が無くなったのか扉の方に顔を向けた。すると、咲夜さんが料理を持って入ってきた。
「咲夜、パチュリーたちは？」
「今こちらに向かっているかと」
「そう、あの子は？」
「今すぐお連れします」
パチュリーやあの子って誰のことかな？二人の会話についていけずぼんやり立っていた。
咲夜さんはどこかに急いで向かっていった。
「桜、そこの椅子に座りなさい」
レミリアさんに声をかけられおとなしく指差された椅子に座る。
「これから何人かここの住人が朝食を食べに来るわ挨拶をちゃんとすることね」
「は、はい。どんな人なんですか」
「吸血鬼に魔女、小悪魔、妖怪ってとこかしら」
「・・・え！？」
まだ吸血鬼いるの？どうなるの私？

お嬢様に言われた通り急いで妹様の部屋に行く。急がなくては食事が冷めてしまう。
やっと地下室にたどり着く。扉の向こうから音はしない。
トントン
「妹様失礼します」
扉を開けるとベッドに座っていたので声をお掛けした。

「お食事の用意が出来ました」
「ふぅん、わかった。行こう咲夜」
「はい」
今日は落ち着いていらっしゃるようだ。まぁいつもいつも物を破壊してばかりでは困るが。
食堂へ向かう途中、パチュリー様と小悪魔に会った。
「咲夜にフラン、食堂に向かうところかしら？」
「はいそうですよ。パチュリー様」
「ふーん。・・・・・・くすっ」
「なっ、何ですか？」
突然パチュリー様がこちらを見て笑い出した。？目線が顔より少し下にずれて・・・首筋・・・！？
「前に教えなかったかしら？吸血鬼に血を「っパチュリー様！食事が冷めてしまいます。急ぎましょう！」はいはい」
私はパチュリー様の言葉を遮るように急いで話しかけた。
パチュリー様も人が悪い。妹様や小悪魔の居るところでそんなことを言わなくてもいいのに。おかげで顔が真っ赤だ。
まぁ昨日の時点で首の傷を見られたらからかわれることはわかっていたが。
っと。やっと食堂に着いたらしい。

レミリアさんに恐ろしいことを言われ、ずっとそのことについて考え込んでいた。
ガチャ
「お待たせしましたー。咲夜さんごめんなさい」
赤い髪をした中国っぽい女の人が入ってきた。
「美鈴、咲夜はいないわよ」
「あっ本当だ。・・・あれ、その子誰ですか？」

「みんなが集まってから話すわ」
トントン
「お嬢様、妹様をお連れしました」
「レミィ、私たちもついたわよ」
扉を開けて入って来たのは咲夜さんと長い紫の髪をしたパジャマのような格好の人と長く赤い髪に黒い翼が頭と背中についた人に金髪でピンクの帽子を被り、宝石のようなきれいな翼をもった女の子だった。
「あら、レミィその子は誰？」
「本当だ。お姉様、人間の女の子？」
紫の髪の人と金髪の女の子が私のことを不思議そうに眺めている。
「その話は後よ。せっかくの朝食が冷めてしまう」
「はーい」
「わかったわ」
みんな席につき―咲夜さんはみんなに給仕をしていた―食べ始めたので私も食べることにした。
パクッ、モグモグ
「美味しい」
「当たり前ですよ。咲夜さんは料理上手ですから」
隣に座っていた中国っぽい女の人がにこにこ笑っていった。
「そう言ってくれるのは嬉しいけど、後でお仕置きよ美鈴」
咲夜さんがいつの間にか後ろに立ち美鈴さんに話し掛けていた。
「えー、どうしてですか？」
「あなた昨日私が居ない間にまた魔理沙に侵入されたんですって？」
「ごめんなさい。ナイフは止めてください」
ナイフを持つ咲夜さんの後ろに真っ黒なオーラが見えている気がする。
あれは絶対怒ってるだって笑ってるけど目が笑ってないよ。
「あなたが全部避ければいい話よ」
「咲夜さんのナイフは避けようがないんですよ」

何か美鈴さんがだんだん涙目になってきてるような気がする。
「咲夜それくらいにしておきなさい」
突然レミリアさんが止めに入った。美鈴さんが助かったという表情になる。それを見た昨夜さんはため息を吐いた。
「はいお嬢様。美鈴この話はまた後で」
そう咲夜さんに声をかけられると美鈴さんは後のことを想像したのか真っ青になり震えだした。あまりにも様子が変だったので声をかけてみることにした。
「美鈴さん、大丈夫ですか？」
「わ、わたしはまだ死にたくないです・・・」
だめだまったく聞こえてない。諦めずにもう一度声をかけてみる。
「美鈴さんご飯食べないんですか？」
「・・・・・・」
返事が無いただの屍のようだ。
「ご飯冷めちゃっても知りませんよ」
「・・・・・・」
とりあえず固まった美鈴さんは放っておく事にして、早く食べないともったいないのでご飯を食べることにした。
モグモグ
うん、やっぱりおいしい。咲夜さんは料理の天才だね。
モグモグモグ
「ごちそうさまでした」
満足満足。いやー、やっぱりおいしいとすぐ食べ終わっちゃうね。
「食器を片付けさせていただきます」
ふと見ると、咲夜さんが台車にみんなの食器を置いていた。隣の部屋に運んで洗うんだろう。
「さてそろそろみんな食べおわったわね」
レミリアさんが話し始めた。多分私のことについてだよなー。
ん？レミリアさん話しだしたけど構わず台車を押して部屋から出ていったぞ咲夜さん。いいのかな？

「さっきの質問に答えるわ。この子のことだけど昨日の晩咲夜と散歩に行って見かけたので面白そうだから連れてきたわ。」
レミリアさんはそれだけ言うと静かに紅茶を飲んだ。
説明短いなー。
「・・・それだけ？」
紫の髪の人が呆れたように聞く。
うん、そういう反応になるよね。
「ええ、ほら自己紹介しなさい」
えっ、いきなりですか。
「えっと、桜です。年齢は１２才で親に捨てられた所を拾われました」
「へー、私はフランドール・スカーレット、吸血鬼だよ。よろしくねー桜」
フランちゃんが笑いながら話しけてきた。
この子が吸血鬼か。いい子っぽいし大丈夫だよね。
「私はパチュリー・ノーレッジ、魔女よ。よろしく」
「私はパチュリー様の使い魔、小悪魔です。よろしくお願いします」
あー、使い魔ね。道理で頭に翼が生えてるわけだ。
「私は紅美鈴、妖怪でここの門番してます。よろしくお願いしますね」
美鈴さん復活しましたか、早いですね。
っていうか妖怪ってあなただったんですね。
「はい。よろしくお願いします皆さん」
「詳しい話は咲夜から。咲夜」
「はい」
レミリアさんが呼ぶといきなりその隣に咲夜さんが現れ返事をした。
「昨夜魔法の森上空を通過中子供の泣き声を聞き、近づいたら桜がいてお嬢様が面白そうだからと連れてきました」
レミリアさんより詳しく話したよ、咲夜さん。とゆーかあそこ魔法の森だったんだね。

「レミィ。つまりこれからこの子はこの紅魔館に住むということでいいのかしら？」
パチュリーさんにそう聞かれたレミリアさんはにやりと笑いながらいった。
「簡単に言えばそういうことよ」
パチュリーさんがやれやれまたかといった表情でうなずいた。
「あなたが決めたんなら何言っても無駄ね。この子もメイドになるのかしら？」
「まあ、本人しだいだけど咲夜の手伝いかしらね」
と言ってこちらを見るレミリアさん。同時にパチュリーさんや他の人も振り返るのでプレッシャーがすごい。
「は、はい。それでいいです」
置いてもらってるだけで何もしないのはさすがにまずいと思い、咲夜さんの仕事の手伝いをすることにした。
「じゃあ、そういうことだから。咲夜よろしくね」
「はい、お嬢様」
「じゃあ、わたしたちは図書館へ戻るわ。行くわよ小悪魔」
「はいパチュリー様」
パチュリーさんと小悪魔は図書館に住んでいるのか？
「フランも戻りなさい」
「はーい」
フランちゃんはいやそうな顔をしたがレミリアさんの言葉に頷きおとなしく出て行った。
「じゃあ私も門番の仕事がありますので失礼し「待ちなさい美鈴」・・・はい」
美鈴さんは逃げようとしたが咲夜さんに声をかけられ、顔面蒼白になり目にはうっすら涙がたまっている。
「まだ話が終わっていないわよ。安心しなさい死にはしないわ」
咲夜さんがそういいながらナイフを持ち後ずさる美鈴さんに近寄っていく。笑っているのが逆に怖い。

「は、話せばわかります。や、やめてください」
「問答無用！」
「ちょっまっ！」
うわっすごっ。大量のナイフが美鈴さんに飛んでくよ。でもぎりぎりでかわせて「きゃん」・・・なかった、いま頭に数本刺さった。大丈夫かな？
「まあこれくらいにしてあげるわ。次にパチュリー様の本が盗まれたりしたらこれくらいじゃすまないわよ」
「うぅー痛い、わかりました」
頭にナイフが数本刺さって痛いですむんだ！妖怪すごいなー。
「じゃあ門番の仕事に戻ります」
「黒白を通さないようにね」
「はい、わかりました」
返事をしながら扉を開け外に出ていく美鈴さん。
「さて、私たちも仕事開始よ」
「はい」
こっちを向いた咲夜さんに素早く返事をしながらこれからどんな仕事をするのかと考え憂鬱になった。

住人たちとの対面（後書き）

もうすぐ新学期なので投稿が遅くなります。申し訳ありません。誤字脱字等があれば教えてください。

初仕事と昼食

「ふぅ、後ちょっと」
私は窓ガラスを拭きながら呟いた。
あの後は部屋から出た咲夜さんについていき、掃除用具を渡され一緒に廊下の掃除をすることになった。
ただし廊下と言っても紅魔館の廊下である、とてつもなく長い。
はぁー、咲夜さんは毎日これをやってるのか、凄いよな。
最初は慣れていなかったので咲夜さんに細かく教えてもらいながらやっていたのだが、しばらくやっていたら咲夜さんが「そんな感じにやってれば良いからこの廊下の窓を全部お願い」と言い、自分は床を掃除し始めたのだ。
まあ、床より窓ガラスの方が楽だろうけどさすがに疲れる。
「よし、後一枚」
そんなことを考えてるうちに窓ガラスは残り一枚になった。
最後だからと気を抜かず丁寧に拭く。・・・よしっ！終わった。
「咲夜さん、拭き終わりました」

あの子はかなり優秀だ。少し拭き方を教えたらすぐに一人で出来るようになった。
これなら掃除も早く終わり妹様の遊び相手が出来るかもしれない。
っと考え事をしていても掃除が終わっている。習慣とは恐ろしい。
「咲夜さん、拭き終わりました」
窓ガラスを拭き終わったのか、ちゃんと拭かれているかしら。
振り向くと笑う桜の横で窓が光っていた。
かなり輝いているなーあの窓ガラス。私と一緒に拭いたのと比べると少し曇って見えるが、初めてやったにしては上出来だわ。

というか本当に初めてやったの？初めてでこの輝きなの？
「あのーどうですか？」
桜が不安そうな顔をして尋ねてきた。返事しなかったから怒ってるんじゃないかと思ってるのね。
「素晴らしいわ。よく頑張ったわね」
微笑みながらそう言うと、桜は安堵したように笑った。
「良かった。上手く出来てるか自信がなかったんです」
「じゃあ次の仕事に行きましょうか」
妹様と遊ぶのならさらに急がなければ。
「うっ、休みなしなんですね。頑張ります」
桜からちょっと冷や汗が出ているのを見た。

窓ガラスを拭き終わったと思ったら次の仕事に行くと言われ、咲夜さんの後を歩いていると突然止まりこう言われた。
「次はここのベットメイキングよ」
ベットメイキングなら力を使わないだろう。そう思い喜んでいたら・・・神経を使った。
手順一　シーツを剥がす。
これは簡単だ。適当に引っ張ればいい。
手順二　新しいシーツを皺がつかないよう慎重に広げる。
まだ平気だ。
手順三　皺にならないようにシーツをかけ、端が出ないように折りたたみしまう。
問題はこれだ。ピンと引っ張りシーツをかけるがベッドが大きいため上手くかけられず、かけられたとしても端を引っ張る時に皺がよりそれを直そうとして別の所がしわしわになる。
「はぁー」
悲しくなってため息を吐く。

ポンッ
「落ち込むことないわ。私も最初は失敗ばかりしてたし」
咲夜さんの手が頭にのせられ撫でられた。
「本当ですか？」
咲夜さんが仕事を失敗する様子が想像できず聞き返していた。
「ええ」
「そういえばここに何歳ごろに来たんですか？」
何年かければこんな完璧に仕事をこなせるのか気になる。
「十代前半だったわね」
十代前半か・・・今二十歳は越えてないだろうから最長で九年くらいか。
「凄いですね」
「そうでもないわよ。さてベッドメイキングは慣れれば大丈夫だからもういいわね。昼食の支度をするわよ」

いつ紅魔館に来たのかと聞かれたけれど詳しくは教えなかった。
何故ここに暮らしているのかという質問をされそうだったから。
拳を握りしめていたのには気付いただろうか？
さあ昼食の支度をしなければ。

「お嬢様、妹様お待たせいたしました」
そう言いつつ食卓に皿を並べる咲夜さん。
「じゃあいただくわ」
「美味しそー」
さっき咲夜さんがまたもやあり得ない速さで料理を作っていたがやっぱりおかしいだろあの速さは・・・ってあれ？

「咲夜さんパチュリーさんと美鈴さんはどこですか？昼食なのに」
レミリアさんとフランちゃんの姿しかないので咲夜さんに小声で聞いてみた。
「パチュリー様なら図書館で研究中だと思うわ。美鈴は門番の仕事中、昼食は差し入れをするからいいのよ」
当たり前のように言われた。
いや、でも食事抜きで研究って体に悪いよね。
「食事しないで倒れたりしないんですか？」
心配そうに言った私の顔を見てナイフとフォークを置きレミリアさんが笑った。
「魔女のパチェが、た、倒れるっ！っははっ！いやパチェならやるかもしれないわ」
レミリアさんはかなり笑っていて、意味がわからず首を傾げる私を見かねたのか咲夜さんが説明してくれた。
「魔法使いはね食事しなくても生きられるように自分に魔法をかけてあるのよ。パチュリー様は喘息持ちで病弱だから倒れるかもしれないけどね」
「そーだよ。パチュリーはよく図書館の埃を吸っちゃって咳してるもん」
フランちゃんも咲夜さんの意見に賛成している。

「くちゅん」
紅魔館の地下の図書館にパチュリーのくしゃみが響く。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫よ小悪魔。レミィが噂でもしてるんじゃないかしら」
心配そうに近寄る小悪魔に返事をしながらパチュリーは思う。
いい噂だといいんだけどね。

カチャカチャ
昼食が終わり咲夜さんと一緒に食器を厨房に運んでいた。
「あのー何で一緒に食事しないんですか？」
「決まってるでしょう。私たちは給仕をするから一緒に食事してたら対応が遅れるわ」
私の疑問に即答されちょっと不思議に思った。
「朝食は私一緒に食べたんですけどいいんでしょうか？」
「構わないわ。あの時はメイドって決まってなかったしね」
そういうものなのか。
「それよりこれを運んで早く食事にしましょう。お腹空いたでしょう」
ぐぅー
その言葉が合図だったかのように私のお腹が鳴り出した。
咲夜さんがクスクスと笑う。
私の顔が熱くなってきた。かなり赤くなっているはずだ。
「すっすいません」
「謝ることないわ。急ぎましょうか、時間を止めてあるから出来たてと変わらない味よ」

私たちの分の昼食をテーブルに置くとよほどお腹が空いていたのか、桜はパクパクとかなりの速さで食べ始めた。
一口食べるたびに嬉しいのか、頬が緩んで幸せそうな顔になる。
ああいう顔をされると作ったこちらも嬉しくなるわね。
「美味しいかしら？」
「はい！とっても美味しいです」
尋ねたら満面の笑みで答えてくれた。

さて、私も食べましょうか。午後からは妹様と弾幕ごっこをするんだから。
・・・美鈴の差し入れ忘れてた。

ズドンッ
跳んでくる犬顔の妖怪を一発の拳で吹き飛ばし、首を傾げる。
「咲夜さんの差し入れまだかなー？」
「ガルゥオォー！」
バキンッ
更に来る妖怪たちを無意識に倒しつつ何時もより遅いなーと呟く美鈴。
「グルゥオォォーーン！！」
先ほどの妖怪たちの二倍程の大きさの妖怪が襲ってくる。
「親玉ですか・・・来なさい！返り討ちにしてあげます！」
いくら普段咲夜や魔理沙にやられようとも、比較している人物が強くて相性が悪いだけ、肉弾戦で負けはしない。
五分も経たずに親玉を倒し、門の前を掃除するため地面に全ての妖怪たちを埋める。

思い出した咲夜が急いで差し入れを持って来るのはそれから二十分後のこと。
哀れな門番である。

初仕事と昼食（後書き）

最後のは美鈴を強く書きたかっただけです。戦闘シーンは苦手なので変だったかもしれません。更新のペースは週一、二回を目安に頑張ります。

ズドン
煙の中から咲夜さんが飛び出て、上に向かってナイフを投げる。
「それくらいじゃ当たらないよ？」
フランちゃんが手を握ると、ナイフが砕ける。
「ふふっ、それはどうでしょう」
パチンッ
咲夜さんが指をならすとフランちゃんの後からナイフが飛んでくる。
それに気付き、笑いながら避けて言う。
「あはは、さすがだね咲夜。本気でいくよー」
「妹様、こちらも本気でいかせてもらいます。でないと死にますので」
お互い一瞬動きを止め宣言した。
『禁忌「スターボウブレイク」！！』
『メイド秘技「殺人ドール」！！』
ズッドーン

～三十分前～
カチャカチャ
「午後の仕事はとりあえず妖精メイドたちに任せて、私は妹様の遊び相手をしにいくわ」
皿洗いの最中に、そう咲夜さんに言われた。
遊び相手と言うことは何かゲームでもするのかな？・・・見てみたいなー。
「私も行っていいですか？」
「桜が？・・・まあ大丈夫よね・・・良いわよ」

聞いたときの間と大丈夫よねって言ったのがすごく気になる。が、あえて気にしないことにした。
「洗い終わったから今度は布で磨くわよ」
キュッキュッ
近くにあった皿を手にとって磨きだす。単純作業なので会話がないと暇だ。
「はーい。あの遊び相手って何するんですか？」
答えを聞くのが少し怖い。
「あー弾幕ごっこよ。知ってる？」
「弾幕ごっこ？」
弾幕ごっこって何だろう。鬼ごっこ的なやつ？
「まあ見ればわかるわ」
苦笑いしながら言われた。見ればわかるか・・・どんなのだろう。

妹様の遊び相手をするときに桜も来るそうだ。妹様に気に入られたようだし、まあ近づかなければ平気だろう。
「さて、行くわよ」
「はい」
コンコン
「妹様。失礼します」
地下室の扉を開けると目の前に妹様が立っていたので驚いた。
「咲夜どうしたの？」
「お暇かと思いまして、弾幕ごっこでもどうでしょうか？」
私が申し出るととても嬉しそうな顔をした。
「やった！最近魔理沙とも遊んでなかったから暇だったんだー。桜もする？」
「へ？」
急にそんなことを言われ驚いたのだろう、桜はポカンとした顔にな

った。
「妹様、桜は弾幕ごっこを知りませんから」
「そっかー残念」
本気でするつもりだったんですか。妹様と戦うなんて一般人には無理ですよ。
「まあ、やろうか」
「はい。その前に少し部屋を広くしますね」
空間を操り私たちが暴れても壊れない様に部屋を広げた。
「うわっ！」
桜が驚いている。普通は部屋が広がれば驚くか。
「桜、あまり近づかないようにね」
「え？」
「始めるよー」
「はい」
私たちは宙に浮き、弾幕ごっこを開始した。

いきなり宙に浮いた！何をするのかなって・・・え？
咲夜さんはナイフを、フランちゃんは弾を互いに投げ合っていた。
相手の弾を、ナイフをギリギリで避け続けている。
「もっと楽しませてよっ！咲夜！」
「まだまだ行けますよっ！」
笑いながら会話している。凄い、私だったら一発も避けられずに終わっているし、会話する余裕なんてない。
若干フランちゃんのほうが高い位置に浮き、思いっきり下向きに弾を投げつけてた。
ズダダダダッ
床が粉々に砕けた。煙で何も見えない、咲夜さんはどうなったんだろう？

～現在～
「勝ったー！」
「痛たた。やはり妹様は強いですよ」
粉がつき白くなった服を払いながら咲夜さんとフランちゃんが会話している。
最後にフランちゃんが叫んだスターボウブレイクが咲夜さんに当たり、今こうして会話しているのだ。
ちなみに部屋の大きさは元に戻った。何でも咲夜さんは時間と空間を操れるらしい。
「あのー弾幕ごっこって結局何なんですか？」
見ていてもわからなかったので恐る恐る聞いてみる。
「あれはね。人間と妖怪、弱者と強者が楽しく戦えるように博麗の巫女、博麗霊夢が作った決闘方法よ」
「決闘？」
「そう。妖怪同士の決闘は小さな幻想郷の崩壊の恐れがある。だが、決闘の無い生活は妖怪の力を失ってしまう。そう思った妖怪がいて博麗霊夢と相談して安全な決闘方法を考えた。それがスペルカードルール。通称弾幕ごっこ」
咲夜さんが説明をしてくれた。が、よくわからない。
「まあ詳しくは今度霊夢が来たら聞いてみれば？その方がわかりやすいと思うわ」
「吸血鬼のところに巫女が来るんですか？」
「ええ、よく遊びに来るわね」
当然のごとく言う咲夜さん。普通の人間は妖怪のところに遊びに来ませんよ。
凄い人なんだな、霊夢さんって。
「霊夢の他にも結構遊びに来る人はいるわよ。アリスとか・・・魔

理沙は遊びに来ているというか泥棒だけどね」
死ぬまで借りてるだけとかなんなのよなどとぶつぶつ呟いている。
苦労しているんだな、咲夜さん。

ツンツン
妹様が突いてきた。
「咲夜ー、お茶の時間になるよ」
「そうですね。お嬢様と一緒にお飲みになりますか？」
「うん！」
嬉しそうに頷いた妹様はお嬢様の部屋の方にとことこ歩いて行った。
「・・・はぁー」
妹様の遊び相手をすると言った時点で予測はついていたが、床が・・・抉れている。
この後床を修復すると思うと頭が痛い。
今度パチュリー様に相談してみよう。床の強度を上げることは可能ですかと。
「あの、大丈夫ですか咲夜さん」
「大丈夫よ。あなたたちここの掃除と修復をしておいて」
地下室担当のメイドに声をかけ、桜と外に出る。

「けほっ」
フランの部屋のほうから爆発音がしたわね。弾幕ごっこかしら、おかげで図書館が揺れて埃が振ってきた。
喘息の発作でも起こしたらどうするのよまったく。
あの爆発なら壁や床が砕けてるはず・・・はぁ、仕方ないわね。
「・・・小悪魔」

「なんですかパチュリー様？」
「物質強化の魔法が必要になりそうだから探してきて。あと掃除もお願いね」
本棚の影から顔を出した小悪魔にそう言うとちょっと困った顔をした。
「それがですね・・・今、揺れで倒れかかった本棚を支えていまして身動きが取れないんですよ」
そんな状況でこの余裕！？何故に本棚を支えながらポーカーフェイス！？
「ちょっと！早く言いなさいよ」
「熱心に本を読んでいたので声をかけるのも悪いかなと」
呪文を唱えると本棚が元に戻り、小悪魔が出てきた。
「怪我はない？」
「ありませんよ。いやーそれにしてもありがとうございます。優しいですねパチュリー様」
「そ、そんなことよりどうでも良いから急いで探してきなさい！」
突然妙なことを言われたので顔が赤くなってきた。若干声が裏返った気もする。
「わかりましたー」
笑って本棚の奥へ消えていく小悪魔。まったく主人をからかうなんて誰に似たのかしら。

その日の小悪魔の日記
今日は図書館が思いっきり揺れた。妹様のスペルカードだろう。
おかげで本棚の下敷きになりかかる。
まあ、パチュリー様の赤面という珍しいものを見れたので別にいい。
というか見れるのなら何度下敷きになってもいい。
明日もあんな顔を見れると良いな。

これからしばらくパチュリーはからかわれ続けることだろう。

弾幕ごっこと図書館（後書き）

どうも、体育祭がもうすぐあって練習で筋肉痛の蒼星石です。からかわれるパチュリーが書きたかったので書いてみました。誤字脱字等があれば教えてください。

紅茶と図書館

カチャ
「お嬢様、妹様お待たせいたしました」
「ありがとう咲夜」
「ありがとー」
あの後、桜と一緒に紅茶とお菓子の準備をして、急いでお嬢様のお部屋に向かったらベランダーちゃんと屋根で日陰になっている―のテーブルでお二人とも楽しそうに笑っていた。
「咲夜ー、今日のおやつは何？」
「ブリオッシュです」
「フランスのお菓子ね」
私が名前を言うと妹様はよくわからない様だったのでお嬢様が説明していた。
話を聞く妹様を見て、桜が話しかけてきた。
「仲が良いですね」
「ええ。お茶のときはたいていこうやっているわね」
パクッ
妹様が一口食べて気に入ったのか無邪気に笑って食べていた。そんな様子を見てお嬢様は微笑んでいる、お嬢様もなかなか妹思いの方だから嬉しいのだろう。
「咲夜、紅茶ー」
「はい」
とても微笑ましい光景だった。

咲夜さんがフランちゃんに紅茶を注ぎながら笑っていた。
それにしても紅茶を準備するときに自分の指を切って少し血を入れ

ているのには驚いた。咲夜さん曰くこうすると二人とも喜ぶということだ。
吸血鬼だから血が欲しいのだろう。
「それでは私はパチュリー様に紅茶をお出ししてきますのでごゆっくり」
咲夜さんが一礼してこちらを向いた。
パチュリーさんは図書館に居るらしいから・・・着いていこう、図書館見てみたいし。
「私も行きます」

コンコン
「パチュリー様、失礼します」
「入って」
ギィッ
古くて大きな扉が開くと、そこには大量の本と本棚があった。
「紅茶を持ってまいりました」
うわー広い。そしてパチュリーさんがどこにいるかわからない。
どこから声が聞こえてくるんだろう。
「こっちよ」
声のした方を向くとパチュリーさんが大きなテーブルに座り本を読んでいた。が、そのテーブルの大部分には本が積み上げられており本が倒れたらパチュリーさんは押しつぶされるんじゃないかと思うほどだった。
「紅茶とブリオッシュです」
「ありがとう」
本を閉じ紅茶をのんびりと飲む。
「咲夜。物質強化の魔法を準備しておいたわ」
「ありがとうございます」

なんでもないような雰囲気で本を指差しパチュリーさんは紅茶を飲み続ける。
「物質強化ってフランちゃんの部屋ですか？」
「そうよ。それにしてもパチュリー様よくわかりましたね」
頷きつつ何故わかったのか首をかしげる咲夜さん。それを見たパチュリーさんは呆れた顔をしていった。
「あんなに揺れれば嫌でも気付くわよ」
「すいません。被害はありませんでしたか？」
「いいわよ。弾幕ごっこはあの子の数少ない楽しみの一つなんだもの」
ブリオッシュをぱくりと食べ、目を見開く。
「おいしいわね」
「気に入っていただけて光栄です」
喜ばれて嬉しそうに笑う咲夜さん。
「いつ強化しに行けばいいかしら？」
「床はメイドが修復したと思うので時間があるときにでも」
「じゃあ紅茶が飲み終わったら行くわ」
「お願いします」
そういえばと思い出したようにこちらを見るパチュリーさん。
「なんですか？」
「あなた本に興味があるならいつでもいらっしゃい。ちゃんと返してくれるのなら借りてもいいし」
家に居たころから本は好きだったのでこれからも読めると思うととても嬉しい。
「い、いいんですか？」
「え、ええ」
私を見て、パチュリーさんはちょっと後ろに下がってかなり驚いていた。そんなに驚かれる顔をしてるかな？

本を貸そうかと言い出したとき、桜が目を輝かせながら近づいたので珍しくパチュリー様が驚いていた。
それにしても桜はそんなに嬉しかったのだろうか？確かに外の世界の本や希少本もかなりあるし、本好きにとっては楽園だろうけど。
「あなた本好きだったの？」
とりあえず桜に聞いてみる。
「はい、結構小さい頃から本ばっかり読んでたんですよ。ここなら面白い本がたくさんありそうだし」
とっても嬉しそうに言う桜を見ていると、このまま図書館に居させていいかなと思った。
「このまま図書館で読んでても良いわよ」
「本当ですか！」
あまりの迫力に私もパチュリー様と同じく後ずさりしてしまった。
「え、ええ、仕事ももうないし。晩御飯の時には厨房に来てね」
「はい！わかりました！」
満面の笑みで返事をして、もう本棚のほうに向かっている。
本棚の間から出てきた小悪魔に何処にどんな本があるか聞いているようだ。
「パチュリー様」
「何？」
本を読んだまま顔を上げずに返事をする、パチュリー様。
「桜をしばらくお願いします」
「ええ・・・ぷっ・・はは っ」
パチュリー様が下を向いたまま突然笑い出した。
どうしたんだろうか、私が何か変なことでも言ったか？
「あの子を見てるとあなたがここに来たばかりの頃を思い出してね。・・・くすっ、今じゃ考えられないわよね。あなたがティーカップを割ったり、美鈴に仕事を教えてもらってたなんて」
「な！？」

突然、ミスをしていた時の事を言われて、恥ずかしさから自分の顔が赤くなっていくのがわかった。
「あの頃は本当に来たばかりで・・・それに！美鈴は前から居たから教えてもらおうと・・・もう！からかわないでくださいよ！」
「いつも冷静なあなたが取り乱すなんてね。そんなに恥ずかしかったかしら？」
くすくす笑いながら尋ねてきたが、ここで答えるとまたからかわれそうなので図書館から出ることにした。
「それでは失礼します。パチュリー様」
一礼して扉を閉めると、私はため息を吐いた。
まったくパチュリー様は人をからかうのが好きなんだから。

「本の量すごいですねー」
「はい。外の世界の本や希少本がたくさんありますからね」
「外の世界の本ですか・・・」
小悪魔さんにここにある本について尋ねてみたら、外の本まであると教えてくれた。外の世界の本なんてどうやって手に入れたんだろうか・・・ってあれ？
「咲夜さんは？」
「あー、仕事をしに戻りましたよ」
小悪魔さんは苦笑いを浮かべながら言った。
「え？仕事もうないんじゃ・・・」
「妖精メイドの監督ですよ。咲夜さんはメイド長ですから」
「そうでしたね。咲夜さんって凄いですね」
私がそう言うと、小悪魔さんは大きく頷いた。
「凄いですよ。一人で紅魔館の管理、侵入者の排除、メイドの指示なんかを全部こなしているんですからね」
一人でこの広い紅魔館の管理をしているのかやっぱり凄いんだな。・

・・そういえば侵入者の排除って何？
「あの、侵入者の排除って？」
「大体の妖怪は門番の美鈴さんが倒すんですけど、たまに入ってきますからそれを倒すんです。あと、魔理沙さんとかは基本的に止められる人が居ませんからその対処もしてるんですよ」
軽く苦笑いしながら小悪魔さんはそう答えてくれた。
魔理沙さんって確か朝の美鈴さんと咲夜さんの会話に出てきたよな。
本を盗まれたとか。
「魔理沙さんって？」
「黒い帽子に木の箒の格好でやってくる魔女ですよ。パチュリー様と仲がいいんですが、貸し出しの期限を守らなくって。最近では盗んでいきますね」
やれやれとため息を吐く小悪魔さん。大変なんですね。
「まあ、魔理沙さんが来るようになってからパチュリー様も友人が増えて嬉しそうですから別に良いですけど」
そうやってにっこり笑う小悪魔さんはとても輝いて見えた。
「さあ好きな本を読んで良いですよ」
「はい！」
私は目の前の本棚に手を伸ばした。

紅茶と図書館（後書き）

今日のおやつはブリオッシュだよ。すいません。夜中のテンション
であの曲を聞きながら書いたらこんなことになりました。誤字脱字
等があれば教えてください。

姉妹とメイド長

とんとん
「はい？」
肩を叩かれて本から顔を上げると、小悪魔さんが目の前に居て小声で話しかけてきた。
「もうすぐ夕食の時間ですよ」
「もうそんな時間なんですか」
面白い本だったから時間を忘れて読んでいたらしい。それより小悪魔さん何故小声？
「ところで何故小声なんですか？」
小悪魔さんが微笑みながら私の後ろを指差した。
振り向くとそこには丸眼鏡をかけながら本を呼んでいるパチュリーさんが居た。
「今集中してるんで話しかけないでくださいね」
「わかりました」
同じく小声で答える。
「部屋までの道順わかります？」
「来たときは咲夜さんに着いてきただけなので、さっぱりです」
恥ずかしかったので軽く笑って誤魔化しながら質問に答えた。
この広すぎる屋敷を迷わずに歩ける日が来るのか不安になってくる。
「ふふっ、だと思いました。案内するので着いてきてください」
笑いながら扉を開ける小悪魔さん。パチュリーさんは放置ですか。
「パチュリーさんは？」
「皆さんが食べてる最中に、妹様の部屋の床を強化してくるらしいですから、大丈夫です」
「わかりました。案内よろしくお願いします」
「はい」
私と小悪魔さんはにっこりと笑いながら図書館を出た。

「やっぱり道順が難しいです」
「うーん、咲夜さんに地図でも作ってもらったらどうですか？」
道に迷いそうになり頭を抱える私を見て、小悪魔さんが閃いたのか面白い提案をしてきた。
「え、仕事が忙しいのに迷惑になるんじゃ」
「咲夜さんなら言えば作ってくれますよ」
優しいですからね、咲夜さんは。そう呟きながら小悪魔さんは長い廊下を歩き続ける。
「厳しいところもありますが基本的に優しいから忙しくないときに頼めば大丈夫です」
「わかりました。後で頼んで見ます」
「頼んでみてください。おっと、着きましたよ」
喋りながら歩いていたためかあっという間に到着してしまった。
「ありがとうございました」
「良いんですよ。それでは図書館に戻りますので」
一礼して来た道を戻る小悪魔さん。
あんまり話してないけどすごくいい人だな。っと早く咲夜さんの手伝いしなくちゃ。
私は扉を開け厨房に入った。

入るとそこは戦場だった。もちろん戦ってるわけじゃないけど、雰囲気がそんな感じだった。
かなりの速さで動き回ってる咲夜さんの周りは、邪魔をしたらナイフで刺されそうな気がしたのだ。
「あ、桜？そこの塩取ってくれないかしら」

よほど焦っているのだろう後ろを振り向かずに指示してきた。
「はい。これですか？」
「ありがとう」
近くにあった物を渡すとそれを受け取って調理している肉にかけていた。
「白い大きな皿を出してテーブルの上に置いて」
「はい、ちょっと待っててください。・・・あった」
棚を空けて白くて大きい皿を探すとすぐに見つかったので、取り出そうとした・・・が背が少し足りず取れない。
「よっと、うりゃっ」
背伸びをするとやっと手が皿についた。落とさないように慎重に・・・っと、成功。
無事にテーブルの上に置く事が出来たの他にも手伝いをしようかと思った。
「咲夜さん、他にすることはありませんか？」
「そこの料理を向こうに運んでおいて」
「はい」

料理を持ち隣の部屋に行くと、レミリアさんとフランちゃんがいた。
誰もいないと思っていたのに既にいたので驚いて、皿を落としそうになったが気を取り直しテーブルに慎重に置きに行った。
「お二人とも早いんですね。まだ全ての料理は出来ないですよ？」
「大丈夫よ。今すぐ来るわ」
「そーそー。もう来るよ」
尋ねた私に同じ笑顔で笑いかけながらそう言った。
「まさかそんなに早く出来」
カラカラ
「お待たせしました。お嬢様、妹様」

「早！」
出来るわけがないと私が言いかけた瞬間扉が音もなく開き、皿やグラス、ワインを乗せたカートを押した咲夜さんが現れた。
「ほらね」
さっきよりも楽しそうに笑いながらフランちゃんが言う。
いやいや嘘だろう。いくら頑張ったってないだろう。あの短時間で料理を完成させてカートに乗せ、さらにワインとグラスも準備するって変じゃないか？
「咲夜さんは仕事を完璧にこなしますねー」
「うわっ！」
「あ、驚かせちゃいました？すいません」
突然美鈴さんの声が聞こえて、思わず声を上げて驚いた。横を見ると困ったように頭を頬を掻きながら美鈴さんが私に向かって謝っていた。
何時の間に入ってきたのだろうか？まったく聞こえなかった。
「美鈴さっさと席に着きなさい。お嬢様たちが待ってるわよ」
何時の間に皿を並べ終わったのか、咲夜さんが美鈴さんを呼んでいた。
「美鈴、早くー」
「わかりましたよ妹様」
みんなに急かされて美鈴さんが席に着くと、みんな食べ始めた。

「咲夜、ワインを」
「どうぞ」
何時の間にかレミリアさんがワインを飲み始めていた。見た目的に飲んでて良いのか不安になってきそうだ。
「ああ見えて実は四百歳越えてるんですよ。お二人とも」
「え！そうだったんですか？」

美鈴さんの心を読んだかのような発言を聞き、少し驚いたが納得した。レミリアさんには気品というかそういう物がある気がするのだ。ん？お二人ともって言ったってことはフランちゃんも！？え、信じられないよ！？
「咲夜ー私にも」
「はい、妹様」
私の心を知ってか知らずかフランちゃんもワインを飲み始めた。
飲み方が普段から飲んでいるように自然だった。いや美鈴さんの言葉が本当なら普段から飲んでいるんだろうが。
「咲夜ーいい加減一緒に食べようよー」
「私は給仕がありますしメイドですから」
へ！？一緒に食事できないって咲夜さんが断ってたんですか。
「そうよ咲夜一緒に食べればいいじゃない」
「お、お嬢様まで」
咲夜さんはレミリアさんとフランさんの二人に言われて少し焦り始めた。さっきまで冷静だったけどさすがに主人にまで言われたら焦るか。
「あのー、何で咲夜さん断ってるんですか？」

美鈴と一緒にこちらの様子を静かに見ていた桜が唐突に口を開いた。
「咲夜は真面目だから給仕の仕事をするために断ってるのよ。別に食べながらでもいいのに」
桜の質問にやれやれといった表情で私を見ながら、お嬢様が答える。そう言われても、それでは反応が遅れてしまうしメイドの立場で主人と一緒に食事するのはどうかと思う。
私が反論のために口を開こうとした時、妹様が喋りだした。
「お姉さまもああ言ってるんだし一緒に食べようよ。逆らったらそれこそメイドとして問題なんじゃない」

・・・それは脅しですか？妹様。
助けを求めて美鈴たちの方を向くと、美鈴が哀れみの表情をしていた。
諦めろってことなのかしら？はあ、次回からは食事を一緒にしますか。
「そう言われたら反論出来ません。次回からご一緒させて頂きます」
「やった！」
妹様。私は今この時ほどあなたを恐ろしいと思ったことはありませんよ。
「なら、桜も一緒ですかね」
美鈴が飛び跳ねて喜ぶ妹様と笑みを浮かべたお嬢様を見て苦笑しながら私に話しかけてきた。
確かに美鈴の言うようにしたほうが良いだろう。
一人で食事させるわけにはいかないし、妖精メイドと一緒に食べるのも種族が違うから落ち着かないだろうし。
「お嬢様」
「もちろん最初からそのつもりよ」
お嬢様は尋ねた私に不敵な笑みを返してきた。
さて、後は桜に伝えるだけか。
「桜、聞いていたと思うけど私は次からここで食べることになったわ。だからあなたも一緒にここで食べることになる。それでもいいかしら」
「構いませんよ」
こちらを向いてあっけらかんと言い放った桜を見て、私はやはりお嬢様たちにはかなわないと悟った。
だってどう行動したとしてもあのお二人の言う通りになるのだから。
夕食が終わり自分たちの分も食べ終わって皿を洗っていたら、まだ

咲夜さんにパチュリーさんが床を強化したと伝えていなかったことを思い出した。
「あの、咲夜さん」
「何かしら？」
こちらを見ながら皿を洗い続けている咲夜さん。手慣れていると言うか何という。
「さっきパチュリーさんがフランちゃんの部屋の床を強化しに行きましたよ」
「そう。紅茶を出すときにでもお礼を行っておこうかしら」
「もう夜ですけど？」
真夜中に紅茶を出しに行くのは、ちょっと変だと思う。「地下に昼も夜も関係ないわよ。パチュリー様は寝る必要もないし」
食事も睡眠もとる必要がないんですか。
そんなことを話している間にも咲夜さんは皿を洗い続け、私がグラスを三個洗い終わる頃には全ての皿を洗い切っていた。
「咲夜さんって凄いですね」
私の方を向いているのにこんなに短時間で皿を洗い終えるなんて本当に凄いと思う。
「何が？」
「お皿の事ですよ」
「あー。いや、皿はね。これで当然と言うか、もう無意識なのよね」
「む、無意識？」
私に言われて初めて気付いたみたいで、自分の手元を確認している。
私はその発言に驚き聞き返してしまった。
「ええ、ずっと同じ仕事をしているとね。もう寝ていても出来るんじゃないかって思うくらいよ」
そこまで行くと凄いとしか言いようがないです。
「まあ、慣れよ。さあ仕事ももうないしお風呂にでも入って寝ましょうか」
「はい」

「ふぅ、すっきりしたー」
私の横で頭を拭きながら桜はそう言った。
「ごめんね。ちょうどいい服がなくって」
今の桜の格好は、先ほどまで着ていたメイド服ではなく、魔法の森付近で見つけたときの桜模様の着物だ。どう考えても寝る時に着るべきものではない。
だけど私の服は大きさが合わないし、お嬢様たちの服を借りるなんて論外。
考えた結果、洗濯しておいた桜自身の服になった。
「これで良いですよ。それにしてもお風呂まで広いんですね」
「ええ、私もさすがに初めて見たときには驚いたわ。メイドたちが大勢で入ったりするからあの広さらしいわよ」
「それなら、あの広さも納得です」
あの浴室はかなり広いから普通の人なら必ずといって良いほど驚くわね。
私のベッドに座り頭を拭いている桜の目がだんだん閉じてきた。よく見れば腕の動きも遅くなっている。
やっぱり子供にはここの仕事は体力的に厳しいかしら。
「明日もたくさん仕事があるんだし早く寝なさい」
「ふぁい、おやすみなさい」
眠さに耐え切れなくなったのか桜は、あくびをかみ殺しながら返事をしそのまま寝てしまった。
「はーあ、私も寝ますか」
昨日と同じくらい安らかに眠る桜の横で私も目を閉じた。

姉妹とメイド長（後書き）

お嬢様たちには勝てない咲夜さんが書きたかった。やっと一日進みました。次回はそろそろあの巫女を出そうかと思います。ご意見、感想があれば書いてください。

巫女との出会い

暖かい。気持ちいいしもう少し眠ってようかな。
「――く起きなさい」
「―くら朝よ」
眠いからもう少し寝かせてくださいよー。
「桜、朝よ。起きなさい」
目を開けると目の前にはメイド服になった咲夜さんが居た。
「おはようございます」
「おはよう。私は朝食の支度があるから先に行ってるわ。そこのメイド服に着替えてすぐ厨房に来なさい」
そう言うと咲夜さんの姿が消えた。・・・え、消えた!?
咲夜さんは突然消えたりするから心臓に悪いな。
「早く着替えて手伝いしなくちゃ」

グツグツ
「スープの味はいいかしら・・・大丈夫みたいね」
桜は呼んだからすぐここに来るはずだしスープも出来たし、後はパンと皿の準備ね。
「すいません遅くなりましたー」
その声に反応して振り向いたらしっかりとメイド服に着替えた桜が立っていた。
「ちゃんと目は覚めた?」
「はい」
「じゃあ皿の準備をお願い。スープ用の皿を人数分と大きく平らな皿を二枚ね」
桜にそれだけ伝えると私はパンの調理を開始した。

まず、先に作っておいた生地に胡桃を加え、適当な大きさに分ける。
形を整えたら表面に黄身を塗り、オーブンに入れて焼く。
結構早く出来たわね。桜はちゃんと皿を出してくれたかしら？

浅い皿を人数分って事は、私に咲夜さん、レミリアさんとフランちゃん、美鈴さん、パチュリーさん、小悪魔さんの七人だから七皿出せば良いんだよね。
私は食器棚を開け、全部で九枚の皿を取り出してテーブルに置いた。
あ、そういえばまだ咲夜さんに地図頼んでないや。いつ頼もうかなー？
「桜、皿の準備は出来た？」
「出来ましたよ」
「そこにあるカートにスープ用の皿を置いて」
少し周りを探すと後ろにカートがあったので、言われた通りに七枚とも重ねておいた。
咲夜さんは確認すると、鍋を持ちカートの上に置いた。
「ここで注ぐとテーブルに置くときに失敗するかもしれないでしょう？だからスープなんかは慣れるまで向こうで注いだほうがいいのよ」
「なるほど」
「今日はあなたがやってみてね」
「え、私ですか？」
咲夜さんの話を真面目に聞いていたら突然そんなことを言われてしまった。
自信を持って言えます。絶対無理です。
「他に誰がいるのよ。大丈夫、失敗しそうになったら教えてあげるから」
「は、はい。・・・ん？」

何かいい匂いがしてきたような。
「あ、パンが焼けたみたいね」
オーブンを開けるとその匂いがますます強くなった。咲夜さんは、パンを取り出して私が出しておいた皿に乗せた。
「さて、準備も出来たし行くわよ。桜、そのカート押していって頂戴」
「はい」
パンの皿を手に持ち、咲夜さんは厨房から出て行った。

「上出来だったわよ」
「ありがとうございます」
席について食事をしながら私は咲夜さんと会話していた。
「スープが大丈夫だったし、これから仕事を増やしていこうかしら？」
「で、出来れば遠慮したいです」
そんなことを言われたせいで、笑おうとしたら引きつった笑みになってしまった。
七人分の皿に一つ一つスープを注ぐのは結構集中力がいった。
しかも、いきなり美鈴さんに声をかけられたときには驚いて大変なことになりそうだった。
このままでは本当に仕事が増えそうなので話をそらすことにする。
「ところでパチュリーさんって朝は来るんですね」
「なんでも朝ぐらいは顔が見たいってお嬢様が言ったらしいわ。図書館から出ないから会う機会が皆無だって」
「あー確かに」
会ったばかりだが、パチュリーさんにはあまり図書館から出なさそうな印象がある。
食事もいらないとなれば会う機会も減るだろう。

「ああ、そうだ。今日は早めに仕事を片付けるわよ」
「え？何でですか」
「お客が来るのよ」
咲夜さんは笑ってそう言った。
「美鈴、あの子が来たらお客だから通してあげなさい」
「はい、わかりました」

「咲夜さんあの子って誰ですか？」
先ほどの宣言通りにさっさと皿洗いを終わらせ、窓拭きをしながら
私は、廊下を掃除中の咲夜さんに聞いてみた。
「んー、・・・すぐわかるわよ」
ちょっと迷ったようだがすぐに悪戯っぽく笑って咲夜さんは何も教
えてくれなかった。
「えー？教えてくださいよ」
「はいはい、口を動かす暇があったら手を動かしなさい」
「はーい。あ、そうだ咲夜さん紅魔館の地図作ってくれませんか？
手が空いてるときで良いですから」
今なら頼んでも大丈夫だろう。
「地図？良いわよ」
「ありがとうございます」
小悪魔さんありがとう！これで迷うこともなくなるよ。
「よし終わったわ。そっちはどう？」
あの廊下全部やったんですか！？こっちは後一枚か。
「あ、後ちょっとです。・・・終わりましたー」
「そろそろだと思うから紅茶の準備をしとくわよ」
私の言葉に頷くと廊下を歩き出した。
「ま、待ってください」

「この間誘われたから飲みに着たわよ」
紅魔館の扉を堂々と開けたのは紅白衣装の巫女だった。
「いらっしゃい霊夢」
「ん？隣に居るの妖精メイドじゃないわね。あなた名前は？」
咲夜さんと並んで立っている私に気づいたようで不思議そうな顔で名前を聞いてきた。
「桜です」
「ふーん、よろしく。私は博麗霊夢よ。咲夜、この間来たときには居なかったわよね」
「つい最近来たのよ。紅茶とケーキは準備してあるわよ」
「ありがと。ここで働く物好きな人間なんてあんたしか居ないと思ってたわ」
霊夢さんはすごい人って聞いてたけど意外と話しやすそうだな。
「霊夢、後で桜にスペルカードや能力について詳しく説明してあげて」
「はいはい。それより早く行きましょ」
言うが早いか霊夢さんはずんずんと紅魔館の奥に突き進んでいった。
「まったく、私たちも行きましょうか」
「はい」

「やっぱ美味しいわね咲夜の作ったケーキ。レミリア、咲夜ちょっと貸してくれない？」
「貸さないわよ。私の従者ですもの」
「咲夜が居なくなったら紅魔館大変なことになるだろうしねー」
紅茶とケーキを楽しみながら霊夢さんはレミリアさん、フランちゃんと冗談を言い合っていたが、ふと真面目な顔になってこう言った。

「で、スペルカードルールと能力の説明だっけ」
「ええ頼むわ」
霊夢さんは、仕方なさそうに頷いた後こちらを向いて話し出した。
「多少は聞いたと思うけど、スペルカードルールの理念は聞いた？」
「まだです」
「一つ、妖怪が異変を起こし易くする。一つ、人間が異変を解決し易くする。一つ、完全な実力主義を否定する。一つ、美しさと思念に勝る物は無し。っていうのが理念よ。要するにお手軽な決闘方法ね」
簡単にまとめましたね。まあ確かに咲夜さんとフランちゃんのは決闘みたいだったけど。
「これが出来た理由は吸血鬼異変なんだけど面倒だから省くわ。これを使って最初にあった異変がそこのレミリアの起こした紅霧異変ね」
その言葉と同時に霊夢さんがレミリアさんの方を向くと、レミリアさんは澄ました顔で平然と言った。
「日光が邪魔だったからよ」
「理由それ！？」
思わず突っ込んでしまった。
「異変なんてだいたいそんなもんよ」
霊夢さんは普通に紅茶飲んでるし。
「能力のほうだけど、例えば私は空を飛ぶ程度の能力、咲夜は時を操る程度の能力を持っているわ」
「ちなみに私、空間も操れるわよ」
ああフランちゃんの部屋が広がってたのは咲夜さんの能力ですか。
「説明面倒だしこれで良いでしょ。咲夜」
「ええ、ありがとう」
「桜、理解できた？」
「はい、大体」
咲夜さんに聞かれたが大体は理解できた。

巫女との出会い（後書き）

テスト期間中だってのに小説を書いてた。テストが近いので更新が遅くなるかもしれません。

宴会好きな鬼（前書き）

蒼星石改め蒼です。
やはり遅くなってしまいました。
待ってくださった方たち申し訳ありません。

宴会好きな鬼

「ふぁー眠い」
霊夢さんが欠伸をしていた。
「ちょっと、人の家に来て昼寝？」
「あんただって神社の縁側とかで寝てるでしょうが」
レミリアさんが突っ込んだが即座に反撃されていた。
「おお！霊夢発見！」
「ん？」
知らない声が聞こえたので周りを見たが誰も居なかった。
「どうしたの？」
「なんか声がしたんですけど。誰も・・・気のせいでしょうか？」
私の返事を聞いて、霊夢さんが空を見た。
「ああ、わかったわ犯人」
「にゃはは！ばれた？」
突然霊夢さんが見ていた所から女の子が出てきた。
「萃香何してんのよ」
霊夢さんが呆れたように尋ねる。
「霊夢を探してた」
「何で？」
「宴か「宴会だったら開かないわよ」・・・いいじゃん！何で宴会だめなのさ！」
萃香ちゃんがにっこり笑って宴会と言いかけたら霊夢さんに即座に断られていた。
「冗談じゃないわよ！私だって宴会は好きだけどこの間やったばかりだし、神社の後片付け誰がすると思ってるのよ！」
苦労しているようだ。
「まあいいじゃない。私や妖夢、早苗なんかも手伝うんだし」
切れかかっている霊夢さんを咲夜さんがなだめている。何処となく

手馴れているように見えるのは気のせいだろうか？
「早苗や妖夢とかは主人に飲まされて寝ちゃったりするし、あんただって早めに帰るじゃない」
「とりあえず今日開けって言ってるわけじゃないし近いうちに開きなさいよ。じゃないと、そこの鬼が暴れるわよ」
レミリアさんがむくれている萃香さんを指差して言った。って鬼！？確かに角は生えてるけど鬼なの！？
「全くしょうがないわねー、今度開くわ」
「やった！」
「あんたそれでも私より年上なの？」
霊夢さんは思いっきり飛び跳ねている萃香さんの姿を見て呆れている。
「あのー、鬼って」
気になったので恐る恐る聞いてみる。
「ん？私は鬼だよ。伊吹萃香さよろしくね」
萃香さんはにっこりと笑いながら手を差し出してきた。
私も手を伸ばし握手をした。
「よろしくお願いします。私は桜です」
「桜か、私のことは呼び捨てでいいからねー」
「いえ、年上なんですよね。なら呼び捨ては・・・」
霊夢さんの発言から年上とわかったし呼び捨てはまずいだろう。
「別にいいのに。ま、好きなように呼んでね」
「はい。萃香さん」
「あ、宴会のときに桜も来る？」
「えっと・・・」
咲夜さんの方を見ると言いたい事がわかったのか、ほほ笑みながら頷いた。
それを確認した萃香さんは笑い、言った。
「よし！宴会の時に飲み比べでもするか！」
「「却下！！」」

が、その瞬間に霊夢さん、咲夜さんに全力で止められた。
「子供が鬼と飲み比べなんか出来るか！」
「二日酔いじゃ済まないわよ」
さっきの怒りも残っていたのか霊夢さんが若干キレている。
「冗談なのにー」
「あなたのは冗談に聞こえないのよ」
紅茶を優雅に飲みつつ、レミリアさんが萃香さんに向かって言い放つと、みんなもそれに同意し頷いた。
「ま、いっか天狗とするし。霊夢もする？」
「しない」
萃香さんは瓢箪に口をつけつつ提案するが、霊夢さんにきっぱり断られてしまった。
「面白そうだねー」
「確かにそうね」
「っちょ、しないって言ってんでしょ」
フランちゃん、レミリアさんは乗り気のようだ。
絶対からかっている。
「結局飲まされるんだしやればいいんじゃない？」
「咲夜まで・・・っとそろそろ帰るわ」
からかわれて頭を押さえていた霊夢さんだが、突然たち上がった。
「仕事？」
「ちょっと里のほうでね」
「大変なんですね」
「仕事だもの当然よ。咲夜美味しかったわ」
私と咲夜さんに返事をしながら部屋の扉を開いた。
「ありがとう。頑張りなさい」
「ええ。萃香あんたも手伝う約束だったでしょ」
「はいよ」
瓢箪を傾けている萃香さんはその言葉を聞き霊夢さんの横に行った。
「じゃあまた」

そう言うと二人は部屋から出て行った。

「桜、片付けましょうか」
「はい」
あの後レミリアさんたちは図書館に行き、私たちは紅茶の片付けをすることになったのだ。
それにしても巫女が妖怪と友達っていいのかな？
カートに皿などを載せつつそんなことを考えていたら、咲夜さんがこちらを見てきた。
「聞きたいことがあるんなら遠慮せず聞けばいいのに」
「どうしてわかったんですか？」
一言も喋っていないはずなのに何故わかったんだろう。
「子供の言いたい事くらいわかるわよ。で、何が聞きたいの？」
「えっと、妖怪と妖怪を退治する巫女が仲がいいって変じゃないですか？」
質問すると咲夜さんは苦笑いをした。
「霊夢って何故か妖怪に好かれるのよね。最近は神社に強い妖怪が入り浸ってるから神社は妖怪に乗っ取られたって言う人も居るわよ」
「え」
それ大丈夫ですか？いろいろと。
「まあ、霊夢と仲良くするのはやたらと人を襲わない妖怪だし大丈夫なんじゃない？」
良いんですか。
カチャ
カップと皿を全部カートに乗せ、テーブルも拭き終わった。
「さあ皿を洗いに行くわよ」
「はい」

「はー終わったー」
「ちょっと休憩しましょうか」
厨房のテーブルに突っ伏していると目の前に湯気の出ている紅茶が置かれた。
横を見ると咲夜さんも座っている。どうやら注いでくれたらしい。
「疲れたときには紅茶が良いわよ」
「あ、ありがとうございます」
貰った紅茶をちびちびと飲んでいると、紙の擦れる音がした。
咲夜さん紙なんか持ってたっけ？
チラッと見ると、咲夜さんの手元には未完成だが紅魔館の詳細な地図があった。
仕事早くないですか！？頼んだの昼ですよね？
あまりの早さに驚いている間に咲夜さんがいくつか文字を書き込み、地図を完成させていた。
「はい、地図よ」
「ありがとうございます咲夜さん。早いですね」
「そんなに早くないわよ？」
差し出された地図を受け取りながらそう言うと、咲夜さんはこれくらい当然という顔をして首を傾げながら答える。
どこが早くないんだろうか。
「いや、お昼に頼んだのにもう完成してるし」
「ああそれは時を止めてやってるからよ」
思い出したかのように教えてくれたが、時を止めたことを忘れるかな？それともいつもやってて慣れたのか？
「地図使えそう？」
「大丈夫です」
私の返事を聞いて安心したのかにっこり笑っている。
「じゃあ、もう少し休憩したら見回りに行くわよ」

「はい」
そういえば何となく勢いで返事をしてしまったが、見回りって何をするんだろうか？

宴会好きな鬼（後書き）

次回は紅魔館の見回りです。
黒白の泥棒はたぶん出てきません。
そして、更新がまた遅いと思いますが、出来るだけ急ぎます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8097h/

吸血鬼とメイドと少女

2010年10月11日19時54分発行